

## 「おふでさき」を読むということ

「おふでさき」は中山みきによって書かれた。いや、より正確に言えば、それは親神がみきに書かせた。みきが筆を執ると昼夜の別なく筆が走り、一度親神の思いを記し終えるとびたりと止まったという(『教祖伝』168頁)。その様子をみき自身が次のように述懐している。

「神様は、『筆、筆、筆を執れ。』と、仰っしゃりました。七十二才の正月に、初めて筆執りました。そして、筆持つと手がひとり動きました。天から、神様がしましたのや。書くだけ書いたら手がしびれて、動かんようになりました。『心鎮めて、これを読んでみて、分かんこと尋ねよ。』と、仰っしゃった。自分で分かんことは、入れ筆しましたのや。それがおふでさきである。」(『逸話篇』31頁)

このような執筆の様子を実際に目の当たりにしたならば、素朴な心情はそこに超越性を見出すだろう。そこでは超越性の運動がまずは中山みきという女性の身体に現れ、次に筆を執った彼女の身体の活動によって幕末期から明治初期の大和近辺に流通していた言葉として流れ出した。超越性の運動は身体に多大なる負荷をかけるのだろう、「手がしびれた」とある。そして、その運動は、身体のレベルから言葉の意味のレベルに位相を移し、人の精神にまで作用しようとする。それが、「心鎮めて、これを読んでみて、分かんこと尋ねよ」という問いかけに入れ筆をしたプロセスに当たる。「書くだけ書く」段階では身体に焦点が当たっているが、手が動かなくなりその機能がストップしたあとは、「心鎮めて」「読んで」理解する知的・精神的な活動が主になっている。

このように「おふでさき」の主導権はつねに超越性の側にあり、その運動は人間の身体的・知的・精神的な領域に及ぼうとする。本連載のタイトルである「「おふでさき」の有機的展開」とはそのような超越性の運動が働く様を示しており、それは「おふでさき」を執筆した者だけではなく読む者にも及ぶ。

読み手に働く超越性の運動を具体的にイメージするために、みきがある女性に「おふでさき」を読むように勧めた次のようなエピソードを見てみよう。その女性は、以前みきから息をかけてもらうことによって足の病気を治してもらったのだが、なお手の震えを苦しめており、再びみきに息をかけて治して欲しいと願った。すると、みきは次のように伝えた。

「息をかけるは、いと易い事やが、あんたは、足を救って頂いたのやから、手の少しふるえるぐらいは、何も差し支えはしない。すっきり救ってもらうよりは、少しぐらい残っている方が、前生のいんねんもよく悟れるし、いつまでも忘れなくて、それが本当のたすかりやで。人、皆、すっきり救かる事ばかり願うが、真実救かる理が大事やで。息をかける代わりに、この本を貸してやる。これを写してろて、たえず読むのやで。」(『逸話篇』245～246頁)

みきはこのように論じ、その女性に「おふでさき」全十七号を手渡した。女性はこの時以来手のふるえが少しも苦にならず、その後生涯「おふでさき」を読ませて頂いたと記されている。

みきが息をかけることで病んだ身体が治癒される時、我々はその場に超越性を見出す。言わば超越性の運動がみきの身体(息)と病んだ身体とのあいだを行き来したとでも表現できる。

しかし、このエピソードでは、みきは息をかける代わりに「おふでさき」を手渡し、その結果、身体のレベルでは手のふるえは残ったが、知的あるいは精神的な領域に超越性の作用が及ぼされた。それは「前生のいんねん」というものを「悟り」「忘れない」ことと関連づけられる。そして、さらにその作用は身体と精神の両方の位相に及んで、最終的には“手のふるえ”という身体が“苦にならない”精神と結びついた。この度は超越性の運動は「おふでさき」を通してその女性の精神と病んだ身体とのあいだを行き来したと言える。

超越的なものが啓典や聖典を通して読み手に作用を及ぼす事態は他の宗教にも見られる。例えば、イスラームの「コーラン」では内容もさることながらその特異な詩的な文体そのものが「奇跡」とされる。つまり、「コーラン」の詩的な美しさはイスラームを敵視する人々でさえも認めざるを得ず、それを超えるアラビア語の詩的な表現は存在しないとされる。また、浄土真宗においても、外国のある地域への浄土真宗の普及に「歎異抄」が一種独特の影響力を及ぼしたという話がある。コーランにしても歎異抄にしても、あるいは啓典・聖典を問わずその他の書物にしても、読み手はその文章からあふれる超越性に「驚き」、畏怖の念を感じる。

「おふでさき」においても「驚き」がなければそれを神の言葉として読むことは叶わない。「不思議が神」という神言もある。しかし、執筆時の様子や震えた手の女性の体験を参照すると「おふでさき」を読むというのは、ただ単に「驚く」ということに留まらず、その超越性の運動に対する読み手の知的・精神的・身体的な応答を必要としているように思える。このことは「おふでさき」がなぜ和歌体で記されているのかということと関連する。

安井幹夫が指摘するように、通常の文章である散文体は意味を誤りなく伝えるために主語と述語があり句読点があるが、和歌には行間が多く、そこにおのずから意味の明晰性を欠くことになる。つまり、言葉の意味を追っていても空白が多すぎてすぐに限界にぶつかる。しかし、ポイントは「饒舌さがことからの理解を助け、正確に伝達するとは限らない。沈黙が事態を正確に映し出すこともある」ことだ。日常生活においても、我々は沈黙が言葉以上の意味や感情を相手に伝える場合があることを知っている。和歌体の形式をとる「おふでさき」は沈黙も含めてある種の感情的・感覚的な言葉に近く、読み手が解釈できる大きな空間を用意している。

ところで、木田元のまとめによると、ハイデガーは、古代ギリシアにおいてソクラテス以前の思想家たちは「驚くべきこと」をあくまで「驚くべきこと」として保持しようとしたと捉えた。そして、その後のソフィスト的な知性の到来によってその「驚くべきこと」にもっともらしい説明が加えられ、プラトン、アリストテレスによって「それは何であるか」「存在とはなにか」という特有の質問に定式化された「哲学」が始まったと批判的に説明した。

「おふでさき」を読むことはそのような意味での「哲学」ではない。しかし、だからといって原初的な「驚き」に留まるものでもないように思う。それは、畏怖の念をもって感じた「驚き」を「心鎮めて」読んで「悟り」「忘れない」ことを要する。そこに信仰者の思案(思索)がある。